

シニフィアンの定義「Un signifiant représente le sujet pour un autre signifiant.」の pour をどのように訳すべきか。

—「フロイトの無意識における主体の壊乱と欲求の弁証法」を手掛かりにして—

伊集院 敬 行

0. はじめに——シニフィアンの定義における pour の二種類の訳

1. 「フロイトの無意識における主体の壊乱と欲求の弁証法」におけるシニフィアンの定義の応用に注目することから分かることについて
2. シニフィアンの定義と糸巻きあそび
3. シニフィアンの定義における「シニフィアン」について
4. シニフィアンの定義と主人のディスクールの対応関係
5. 主体抹消の式と糸巻き遊び
6. おわりに——記号の定義について

0. はじめに——シニフィアンの定義における pour の二種類の訳

論文集『エクリ』(1966) や講義録『セミネール XI』(1964) でラカン (Jacques Lacan, 1901—1981) は、「Un signifiant représente le sujet pour un autre signifiant.」という文を繰り返して述べている。ラカンがこの文をシニフィアン¹の定義とすることから、この文の二つの「シニフィアン」の語に当てはまるものが、ラカンにとってのシニフィアンということになる。しかし、この定義だけでは、それがどのようにシニフィアンを定義しているかは全く分からないだろう。シニフィアン定義のこの捉えどころの無さは、方向を表す「～向って」と、代理を表す「～の代わりに」という、共に pour の訳ではあるが、意味も使われる場合も違う二種類のもものが、シニフィアンの定義の pour の訳として用いられていることにも表れている。

原文の読者なら、pour に色々な意味があっても、pour が pour であることに変わりはないのだから、pour の意味の判断をすぐにする必要はない。しかし、日本語の翻訳の読者は、シニフィアンの定義における pour を「～向って」と「～の代わりに」のどちらかに訳されたものを読むことになる。なお、ラカンのシニフィアンの定義の pour の訳語には「～に向かって」が用いられている

場合が多い。『エクリ』の英語訳でも to が用いられている²。

もちろん、この文の pour をどちらの意味で訳しても、その他の語の訳し方によってシニフィアンの定義のそれぞれの訳が結果的に同じことを意味する可能性はある。しかし、pour が「～向って」を意味する場合と「～の代わりに」を意味する場合はそもそも違うのだから、やはり、ラカンがシニフィアンの定義の pour に与えた意味はこれらのうちのどちらかのはずである。

では、ラカンはどちらの意味で pour を用いたのだろうか。ラカンはシニフィアンの定義を繰り返し述べているが、この定義自体の詳しい説明はしていない。そのため、pour の意味を明らかにするには、ラカンが二つのシニフィアンの関係について述べる箇所を取り上げ、それをシニフィアンの定義に当てはめ、翻ってシニフィアンの定義を考察するしかない。

結論を先に言えば、私は pour を「～の代わりに」と訳すべきだと考える。したがって、シニフィアンの定義は「一つのシニフィアンはもう一つのシニフィアンの代わりに主体を表象する」と訳すべきだと私は考える。

私がこの考察のために注目するのは、『エクリ』(1966)の「フロイトの無意識における主体の壊乱と欲求の弁証法」(Subversion du Sujet et Dialectique du Désir dans l'Inconscient Freudien, 1960)でラカンの、「S(A)」と「それ以外のすべてのシニフィアン」をシニフィアンの定義の二つのシニフィアンに当てはめているところである。なぜなら、S(A)と「それ以外のすべてのシニフィアン」の関係が明らかになれば、翻ってシニフィアンの定義の pour の意味が理解できるからである。

ただし、「S(A)」と「それ以外のすべてのシニフィアン」という二つのシニフィアンの関係が明らかになっても、それらとシニフィアンの定義の二つのシニフィアンとの対応を誤れば、pour の意味も誤解してしまうだろう。つまり、シニフィアンの定義の「あるシニフィアン」と「もう一つのシニフィアン」が、「S(A)」と「それ以外のすべてのシニフィアン」に対応するのか、それともその逆の「S(A)以外のすべてのシニフィアン」と「S(A)」に対応するのかのうち、正しい対応関係のものを選ばなければ、pour の意味は理解できない。

この点において、「フロイトの無意識における主体の壊乱と欲求の弁証法」は他の論文³と違い、シニフィアンの定義にある二つのシニフィアンと、その応用にある二つのシニフィアンの対応関係がはっきりしている。これが、私が「フロイトの無意識における主体の壊乱と欲求の弁証法」を取り上げる理由であ

る。

以上のことから本論は、「フロイトの無意識における主体の壊乱と欲求の弁証法」でシニフィアンの定義が応用される箇所に注目し、それをシニフィアンの定義と照らし合わせることで、pourの意味を明らかにする。そして、pourが「～に代わって」の場合のシニフィアンの定義の解説を試みる。その中で、pourを「～に向かって」と訳すことの問題点、その誤解の理由なども考察する。

1. 「フロイトの無意識における主体の壊乱と欲求の弁証法」におけるシニフィアンの定義の応用に注目することから分かることについて

『エクリ』の「フロイトの無意識における主体の壊乱と欲求の弁証法」で、ラカンは以下のように、シニフィアンの定義に基づき、「S(A)」と「それ以外のすべてのシニフィアン」との関係について説明している。なお、引用文中の下線と○で囲んだ数字は、この文章について考察するために私が付したものである。

Pour nous, nous partirons de ce que le sigle S(A) articule, d'être d'abord un signifiant ①. Notre définition du signifiant (il n'y en a pas d'autre) est : un signifiant, c'est ce qui représente le sujet pour un autre signifiant ①. Ce signifiant sera donc le signifiant pour quoi tous les autres signifiants représentent le sujet ② : c'est dire que faute de ce signifiant, tous les autres ne représenteraient rien. Puisque rien n'est représenté que pour.

Or la batterie des signifiants, en tant qu'elle est, étant par là même complète, ce signifiant ne peut être qu'un trait qui se trace de son cercle sans pouvoir y être compté. Symbolisable par l'inhérence d'un (-1) à l'ensemble des signifiants⁴. ③

この引用でラカンは、まず、下線①のようにシニフィアンを定義し、次に、①を②のように応用している。したがって、①と②の両者を比較すれば、シニフィアンの定義の pourの意味が明らかになると考えられる。しかし、このままでは両者の比較は難しい。そこで、①と②を単純な形にすることでそれらを比較し易くしよう。

まず、引用の下線部①を見よう。この文の c'est ce qui は、文意を強調する働きをするものなのでこれを取り去り、①をより単純な形にすると以下の文①'になる⁵。

Un signifiant représente le sujet pour un autre signifiant. —①'

次に引用の下線部②を見よう。この文の補語である le signifiant は pour quoi 以下の関係代名詞節を含んでいる。この quoi の代わりに先行詞の le signifiant を入れた pour le signifiant を関係代名詞節内の文に補うなら、その文は以下のようなになる。

Tous les autres signifiants représentent le sujet pour le signifiant.

この文には文法的に欠けた箇所はないが、意味の上では都合が悪いことがある。それは、この文の autre (～とは他の、～とは別の) が区別するものが何かが分からないことである。原文の②では、autre が区別する対象は、先行詞として autre の前に位置しているので明らかである。しかし、この先行詞 (le signifiant) を関係代名詞節の文の中に置いたことで、上の文のように le signifiant が autre の後に位置することになり、autre が区別するものが何かが分からなくなってしまっている。

そこで、この autre が区別するものを autre~que……を用いてはっきりさせよう。Tous les autres signifiants の後に que le signifiant を書き込む。そうすると、今度は一つの文の中で le signifiant が繰り返しになってしまうという問題が生じる。これを自然な文にするためには、le signifiant の繰り返しを代名詞を用いて避けるべきだが、本論では、pour の目的語が何かを明らかにする必要があるのでそのままにする。そうしてできた文が以下のものである。

Tous les autres signifiants que le signifiant représentent le sujet pour le signifiant.

つづいて、引用文の③を見よう。ここでは、「S(A) という記号が表すもの (ce que le sigle S(A) articule)」は「なによりもまずシニフィアンというもので

ある (être d'abord un signifiant)」と言い換えられている。

さて、②の Ce signifiant 「このシニフィアン」は、文脈から①の「シニフィアンというものである $S(A)$ 」を指している。そして、②は Ce signifiant を、le signifiant pour quoi tous les autres signifiants représentent le sujet と言い換えている。以上のことから、 $S(A) = \text{un signifiant} \rightarrow \text{ce signifiant} \rightarrow \text{le signifiant pour quoi} \sim$ という言い換えが成り立つ。だから、上で得られた文の le signifiant の位置に $S(A)$ を入れても、意味は成り立つはずである。では、この文の le signifiant の代わりに $S(A)$ を入れてみよう。すると以下のような文を得ることが出来る。この文を②'とする。

Tous les autres signifiants que $S(A)$ représentent le sujet pour $S(A)$. —②'

これらの作業で得られた①'と②'の文は、主語と pour の目的語と動詞の活用以外は同じである。そこで、これらの文を語句ごとに区切り、それぞれの語句の対応関係が分かるように表形式にしてみよう。それが以下の表である。これにより、①と②の内容の比較が簡単になる。①'と②'のそれぞれの語句の訳を表の1列目、4列目に付す。ただし、本論ではこのあと pour の訳を論じるので、この表では「～の代わりに」か「～に向かって」かは不明(?)のままにしておく。

表1 ①'と②'の比較

あるシニフィアンは、	表象する	主体を	?	それとは別のシニフィアン	①'
Un signifiant	représente	le sujet	pour	un autre signifiant.	①'
Tous les autres signifiants que $S(A)$	représentent	le sujet	pour	$S(A)$	②'
$S(A)$ 以外のすべてのシニフィアン (=言語) は、	表象する	主体を	?	$S(A)$	②'

ここで、「フロイトの無意識における主体の壊乱と欲求の弁証法」の記述から、ラカンが用いる記号「 $S(A)$ 」や「tous les autres signifiants= $S(A)$ 以外のすべてのシニフィアン」について確認しておこう。

$S(A)$ は、「他者における欠如のシニフィアン」⁶と読む。この S はシニフィアンを意味する。A は Autre (大文字の他者) の頭文字で、ラカンにとってこれは「シニフィアンの宝庫」⁷すなわち、シニフィアンの集合としての言語のことである。この A に / が入っていることから、 $S(A)$ は言語に含まれないシ

ニフィアンということになる。したがって、②'の tous les autres signifiants que S(A) は、「S(A) 以外のすべてのシニフィアン」という集合なのだから、言語=Aということになる。

そして、表 1 をみると、この tous les autres signifiants que S(A)=言語がシニフィアンの定義①'の un signifiant に対応していることから、ラカンが、言語というシニフィアンの集合全体を、まとめて一つのシニフィアンとして考えていることが分かる。

以上のことから、②'は、言語の A と、言語以外のシニフィアンの S(A) との関係の説明していることになる。そして、この表から、シニフィアンの定義①'の「Un signifiant (あるシニフィアン)」は言語=A に、「un autre signifiant (もう一つのシニフィアン)」は言語以外のシニフィアン=S(A) に対応することが分かる。したがって、言語と S(A) の関係が明らかになれば、翻ってシニフィアンの pour の意味が明らかになるはずである。

2. シニフィアンの定義と糸巻きあそび

S(A) と tous les autres signifiants (言語) の具体例として、ラカンが何度も取り上げるのは、フロイトの「快感原則の彼岸」(1919) の糸巻き遊びである。「快感原則の彼岸」によると、フロイトの孫は、糸巻きをベッドの向こうに投げるときに「ダー (da=「ある」に相当)」という声を発し、次にそれを引き寄せるときに「オー (fort=「いない」に相当)」の語を発するという遊びを飽きることなく繰り返した。フロイトの観察によると、糸巻きは母を表しており、フロイトは、子供が思い通りにならない母を糸巻きに託して、その現前と消失を自由に演出していると考えた⁸。

この遊びで幼児は、ドイツ語の Da と fort の幼児語である「ダー」と「オー」の一对の声を、言語には含まれない「糸巻き」という記号に結びつけている。したがって、「糸巻き」という「言語以外のシニフィアン」と、「ダー」と「オー」の一对の声という「言語」の関係が明らかになれば、シニフィアンの定義の pour~の意味が明らかになるはずだ。

さて、我々がこの遊びを見るとき、幼児にとって「ダー」は「糸巻きの在」を表し、「オー」は「糸巻きの不在」を表しているように見える。しかし、このように考えることには、以下の理由で誤りである。

この遊びの中で子が「ダー」と声を発したときは、子の目には手と糸巻きが

映っており、「オー」と声を発したときは、幼児の目には手が映っている。このことを表にまとめると以下ようになる。

表2 糸巻き遊びをする子の目に映るもの

幼児の振る舞い	糸巻きを手繰り寄せる	糸巻きを放り投げる
幼児語	ダー	オー
幼児の目に見えるもの	手と糸巻き	手

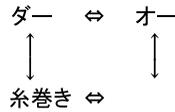
この表から分かるように、「オー」と声を発したとき、子の手元には何も欠けてはいない。そのため、子が「手」を「オー」と命名したということは出来ても、「糸巻きが無い」という状況を「オー」と命名したと考えることは出来ない。つまり、記号とその命名の対象とが一对一で対応すると考える限り、「目で見えないもの」である「糸巻きの不在」を命名することは出来ない。

しかし、二つの記号が二つの状況に対応すると考えるなら、不在という「目に見えない」ものが生じる⁹。

このことを糸巻き遊びで説明してみよう(図1)。まず、「ダー」と「オー」が「糸巻きと手」と「手」に対応すれば、これら二つの状況も対になる。このとき、「ダー」と「オー」のそれぞれの意味は、幼児の目に映るものそのものではなく、それらの間に生じた差異ということになる。その結果、子が「オー」と言ったとき、それだけで見れば何も欠けていない場所に、糸巻きの欠如の意識が生じ、「オー」は「糸巻きがない」を表すようになる。

このことは、円とその内側に出来る穴に喩えることができる。円を描けば、その内側に穴が出来る。しかし、円を消せばその穴も消えてしまう。穴は眼に見えないものであり、それだけを取り出すことは出来ない。これを糸巻き遊びに対応させるなら、糸巻きが「ダー」と「オー」に結びついたことが円に相当し、「オー」と言ったときに生まれる欠如の意識が穴に相当する。このように我々が円の中に穴という欠けた空間を感じるの、かつて我々もフロイトの孫のように、糸巻きと「ダー」と「オー」を結びつけるような遊びをしたからだろう。

これより本論では、視覚的には表現できない「糸巻きが無い」という意識が生じる場を「」と表現する。この「」の部分が、糸巻きが「ダー」と「オー」に結びついたことに相当し、それにより「オー」に生じるものが、その内側と言うことになる。



糸巻きの投擲とそれを引き寄せる運動が「オー」と「ダー」に結びついたとき、両者の間に生じた差異によって、それだけで見れば何も欠けていない空間——この図の場合なら「オー」の下、「糸巻き」の右の空間——に欠如の意識が生まれる。

これを「 」で喻えるなら、この空間はカッコの内側の空間に相当する。そして、上の図でインクで書かれた部分が、この空間を作り出すカッコの部分（「 」）に相当する。

図 1

では、オーとダーが二つの状況を対にしたことで、それぞれに生じる新しい意味を表 2 の下に追加しよう。すると、以下のようになる。

表 3 糸巻き遊びによってオーとダーに生じる新しい意味

幼児の振る舞い	糸巻きを手繰り寄せる	糸巻きを放り投げる
幼児語	ダー	オー
幼児の目に見えるもの	手と糸巻き	手
オーとダーに生じる新しい意味	「糸巻き」 糸巻きがある	「 」 糸巻きが無い

二つの記号が二つの状況を結びつけたことで、両者に差異が生じ、一方に「 」が現れる。こうして「オー」は、「 」（糸巻きが無い）という「目に見えない」ものを意味するようになる。では、このような記号の考え方は、ラカンが参照したソシュールのものやそれ以前の記号観とどのように違うのだろうか。

もし、記号を目に映ったものを命名していくことで成立するものとするなら、記号とその意味の関係は 1 対 1 であり、記号の世界には「目に見えない」ものは存在しない。また、記号の網の目が世界を分節すると考える場合でも¹⁰、そのような記号が分節するものはあくまで「目に見える」ものだけである。たとえそれぞれの記号の意味が差異によって生じるとしても、見える対象を記号で分節するだけでは、「 」は生じない。

しかし、フロイトの孫の糸巻き遊びの場合、「ダー」と「オー」に、糸巻きが結び付いたとき、オー／「 」が生まれ、そこに「目に見えない」糸巻きが浮かび上がる。そして、その「目に見えない」糸巻きが母を表象する。つまり、間接的ではあるが、糸巻きが表象していた母は、糸巻きが消えた後、

「オー」と「ダー」という言語によって表象されている。したがって、「言語は糸巻きに代わって母を表象する」ということになる。

さて、前章で得た文②'は、「S(A)以外のすべてのシニフィアン(言語)は、S(A)の代わりに／S(A)に向かって主体を表象する」であった。これを「言語は、消えた糸巻きに代わって母を表象する」と比較しよう。「糸巻き」は「言語に含まれない記号」であるからS(A)の条件に適う。しかし、糸巻きが「母」を表すことは、②'でS(A)が「主体」を表すことと一致しない。だが、もし「主体」と「母」が同じものであるなら、pourの訳は「～に代わって」が相応しいということになる。

一般的に、「主体」という語が、「主体的」とか「主体性」という形で使われる場合、そこには「行為者」とか「自分自身」のニュアンスがある。だから、「糸巻き遊びにおける主体は誰ですか？」と問われれば、我々は「子」と考えるだろう。しかし、シニフィアンの定義における「主体」は、「子」ではなく「母」もしくは「母子」を表している。これは以下のように説明できる。

人間の場合、他の動物と違って、生れてからしばらくたっても子は自由に動くことが出来ない。そのため、子は自分と母の間にある境界を、筋肉を動かしたり、触ったりして区別することが出来ない。また、子は常に母に世話をされて何不自由なく生きているので、それを確かめる必要もない。したがって、子は自分と母を区別することはできず、自分という意識もないような状態に生きていると思われる。このような母子が混然一体となった状態を「生の主体、S」(sujet brutと読む。sujetの頭文字をとってSと記号化される)という。したがって「生の主体」とは、子でも母でもあるものである(なお、Sを「エス」と発音するように、これはフロイトのEsでもある。フロイトは原初にエスがあり、外界の刺激を受けてその一部が発達し、「自我」そして「超自我」が形成されると考えた)。

かつて子は、このような「生の主体」として、言葉を話すことが必要ないほど満たされていた。もちろん、母子といえども、生れてしまえば別々の固体である。母子融合の状態は、いわば子が未熟で生れてきたことから生じた誤解である。遅かれ早かれ、子は自身と母に開いた隙間に気付かざるを得ない。そして、かつての自分自身の半身としての母を求めるが、その探求は挫折し、母それ自体ではなく、その代理としてまず糸巻き、次に言葉を掴む。しかし、これによりかえってこの隙間は決定的なものとなる。こうして子は、母子が混然一

体となっているものからこぼれ落ち、子がその残りカスとして取り残される。

したがって、子が糸巻きに託した母とは、現実の母ではない。それは、母と自分の区別が出来る以前の、母子が混然一体となった状態＝「生の主体」である。このような「生の主体」が、糸巻きで表象されていたものから言語によって代理表象されたものになったとき、それは「目に見える」ものから「目に見えない」もの（後で説明するように、これが「対象 a」である）へと変わってしまう。こうして、子は、かつての主体の一部であった母を二度と目にする事はなくなり、子は母子が混然一体となった状態 (S) から決定的に引き裂かれ (ノは去勢を意味する)、s となるのである。

以上のことから、子が求める母とは、自分とは別の個としての母というよりも、母子が融合したもの、すなわち、「生の主体」である。したがって、「言語は、糸巻きに代わって主体を表象する」と言い換えることができる。そこで表 1 を見よう。この文は表 1 の②' に相当するから、シニフィアンの定義の pour は「～の代わりに」を意味すること、そして、シニフィアンの定義は、糸巻き遊びを公式化したもの、すなわち「去勢」を表していることが分かる。

では、シニフィアンの定義と糸巻き遊びとの対応関係を確認するために、シニフィアンの定義の各要素に、それに対応する糸巻き遊びの各要素をカッコで括ったものを付してみよう。すると、「あるシニフィアン (言語、「ダー」と「オー」) はもう一つのシニフィアン (糸巻き) の代わりに主体 (ただし、主体はs としての子ではなく、生の主体の主要部分としての母である) を表象する」となる。表にすると以下ようになる。

表 4 シニフィアンの定義と糸巻きの各要素の比較

	Une signifiant	pour un autre signifiant	le sujet	représente
Signifiant の定義	ひとつの シニフィアンは	もう一つのシニフィアンの 代わりに	主体を	表象する。
糸巻き 遊び	言語は (「ダー」と「オー」)	糸巻きの代りに	原初の主体の 半身 (母) を	表象する。

3. シニフィアンの定義における「シニフィアン」について

さて、「言語が糸巻きに代わって主体を表象する」と言えるなら、言語が「あるシニフィアン」であり、糸巻きが「もう一つのシニフィアン」として、これらはシニフィアンの定義を満たしていることになる。そこで本章では、これら、糸巻きと言語という二つのシニフィアンの関係に基づいて、ラカンの「シニフィ

アン」の語について考えてみよう。

言語には含まれない糸巻きと、言語を構成する記号を同じ「シニフィアン」の語で呼ぶことに違和感を覚えるが、これは、オーケストラにおける指揮者と演奏者のようなものだと考えれば納得できるだろう。オーケストラで唯一指揮者は音を出さない。だからレコードには指揮者の音は録音されない。しかし、指揮者もまたオーケストラのメンバーである。我々は、音として「耳に聞こえない」指揮者を聴く。この場合、指揮者が糸巻きに、他のオーケストラのメンバーが言語シニフィアンに相当する。

指揮者が聞こえないにもかかわらず、我々はそれを感じることができるように、人間の記号体系である言語には、「死」や「無」や「空」や「虚」のような、生体の器官では捉えることができないものを表す語がある。

それは、人間の記号体系である言語が「」を中心に構造化されているからであった。そして、言語は「」を作り出し、維持する構造でもあった。このような言語の構造を子が受け入れたのは、糸巻きと言語によって「」を捉え、そこに目に見えない母を作り出すことで、母を諦めなければならなかったからであった。それに対し、去勢を経ない動物には、たとえ記号を用いようとも、「」すなわち「目に見えないもの」は存在しない。人間の記号と動物の記号にあるこの違いを区別するために、ラカン は記号とは別に、「シニフィアン」という語を使ったのである。

だから、言葉を獲得するまでは、子も動物と同じように「目に見える」ものだけの世界、すなわち記号の世界に住んでいたのである。このとき、子が探す母は「目に見える」ものとしてどこかにあるはずであるから、この場合の母は「目に見えない」のではなく「見当たらない」のである。したがって、幼児が手にした糸巻きは、まずは記号として「見当たらない」母を表していたことになる。

しかし、記号としての糸巻きが「ダー」と「オー」と結びついたことで、シニフィアンの定義の「もう一つのシニフィアン」になったとき、糸巻きに代って「」に想起される「目に見えない」糸巻きが母を表象する。その結果、母は言葉でしか捉えられないもの、すなわち「目に見えない」ものとなる。それは母が「どこにもいない」ということではない。喩えるなら神の姿を見ることが出来なくても、その存在を疑わない信仰心の深い人のように、子は母を「目に見えない」ものとして受け入れたのである。

さらに神の喩えを続けて使うなら、さまざまな宗教で神の痕跡が保存され、それによって神の存在が間接的に示されるように、子には、母の痕跡を示すものとして、言語が残ったのである。糸巻きがベッドの向こうに消えた後、かつて糸巻きがあった手元の場所に、「ダー」と「オー」が穴を穿ち、そこに「 」という空白、痕跡が生じる。

このようにして、「ダー」と「オー」という最初の言語がこの空白を作り出し、その後、言語はこの空白を中心に構造化されていく。この空白に「目に見えない」糸巻きが想起され、そして、この「目に見えない」糸巻きが母を表すことで、母もまた神のように「目に見えない」ものとなる。つまり、言語を獲得するまで、子にとって母は「目に見える」ものとして探求されていたが、言語を知ったことで、「目に見えない」ものへと変化したのである。そして、これにより、人間の世界には「目に見える」世界のほかに、「 」という「目に見えない」世界も加わったのである。

ところで、このとき、器官としての目には「 」は「目に見えない」のだから、それを見ているのは何だろうか。もし、それを「心」というなら、言葉は心の目であると言えるだろう。むしろ、「目に見えない」ものを見る目を心と呼ぶべきかもしれない。その意味で、心は言葉でできている。

では、「目に見える」ものしか知らない子が「目に見えない」ものを知ったとき、どのような変化が起こるかを想像してみよう。まず、「目に見えない」ものが存在しないのなら、子が探している母は「目に見えるもの」として必ずどこかにあるはずである。この場合、たとえ母が見えないとしてもそれは「目に入らない」、「見当らない」だけである。そのため、それを探す者は、その探求を諦めることができない。しかし、探している母が「目に見えない」世界のものなら、それと出会うことは諦めざるを得ない。言語によって母が「目に見えない」ものになり、子自身は「目に見える」世界に取り残され、母は「目に見えない世界」の彼方へ消える。これが子の母の探求に終止符を打つ¹¹。

こうして言語の獲得は、子を母から切り離し、それを独立した個体にする。同時に、「 」を理解したことで子は、自分もまたいつか「 」になること、すなわち「死」を理解する。反対に言えば、「 」を知らない動物は死なない¹²。こうして子は、動物としてのヒトから、「死すべき話す主体」(S)に生まれ変わる。したがって、シニフィアンの定義における主体とは、この「死すべき話す主体」としてのSではなく、かつての自分の半身としての

母ということになる。つまり、 \mathcal{S} はシニフィアンの定義における「主体」ではない。

なお、もし動物の言語にも「 \mathcal{S} 」を表す語があり、死という限界が自分自身にもあることを理解しているなら、動物も墓を建て、闇を恐れるだろう。しかし、そのような動物はいない¹³。言語にそのような語があるのは、動物の乳離れが本能で行われるのとは違い、未熟なまま生れてくる人間の子の乳離れは、言語の獲得によって行われるからだ。このとき人間は、死という限界をもった個体＝主体となる。それに対し、動物の各個体は緩やかに繋がっている。動物の個体は人間の主体と同じではないから、動物は死なない。動物が、個体よりも種の保存を最優先するのは、そのためである。個の限界は種によって乗り越えられる。それに対し、人間は、一人の命のために多数の命を犠牲にさえるのである。

4. シニフィアンの定義と主人のディスクールに対応関係

2章の考察で、pour は「～に代わって」と訳するのが相応しいことを確認したが、pour を「～に向って」と訳することにはどのような問題があるだろうか。

ラカンが、シニフィアンの語を用いて去勢について論じるものの一つに「主人のディスクール」というものがある。これは、1969年のセミナー XVII、『精神分析の裏面』で登場した式であるが、それとよく似た図は、すでに『精神分析の四基本概念』に登場している（本論第5章の図2）。

$$\frac{S_1}{\mathcal{S}} \rightarrow \frac{S_2}{a}$$

それらの中に→があり、それが S_1 と S_2 という二つのシニフィアンを結んでいる。この S_1 と S_2 がシニフィアンの定義を満たすなら、→は pour に相当することが分かる。そして、pour が→を意味するなら、pour が、方向を示す前置詞「～に向かって」と考えるのは自然である。その結果、シニフィアンの定義を、「 S_1 は S_2 に向かって \mathcal{S} を表象している」と考えてしまうだろう。

しかし、この解釈は以下の理由で誤りである。

主人のディスクールの場合、 S_1 は最初のシニフィアンすなわち、 $S(A)$ であり、 S_2 はそれに続く二番目のシニフィアン、すなわち言語全体 ($A = \text{tous les autres signifiants que } S(A)$) であるから、「 S_1 は S_2 に向かって主体を表象する

(S_1 représente le sujet pour S_2 .)」にそれらを代入すれば、「 $S(A)$ représente le sujet pour tous les autre signifiant.」となる。

しかし、これを「フロイトの無意識における主体の壊乱と欲求の弁証法」の②を変形して得た②'である「Tous les autres signifiants que $S(A)$ représentent le sujet pour $S(A)$.」と比べると、主語と pour の目的語が入れ替わってしまっている。さらに、シニフィアンの定義において表象される「主体」とは子=Sではなく、母、もしくは生の主体=Sである。これは、主人のディスクールでは a に相当するものである。

つまり、もし、主人のディスクールの→を念頭において、シニフィアンの定義の pour を「～向って」と訳し、あるシニフィアンを S_1 、もう一つのシニフィアンを S_2 と理解するなら、そのようなシニフィアンの定義の理解は、「フロイトの無意識における主体の壊乱と欲求の弁証法」の記述と矛盾する。

その逆に、主人のディスクールの S_1 と S_2 と a を、「フロイトの無意識における主体の壊乱と欲求の弁証法」の記述に従って正しくシニフィアンの定義に代入したものである「 S_2 représente le sujet pour S_1 .」の pour を「～向って」と訳すなら、「 S_2 は S_1 に向かってに主体=a を表象する」となる。つまり、 $S_2 \rightarrow S_1$ ということになる。これでは、主人のディスクールの $S_1 \rightarrow S_2$ と矛盾する。

このように、pour を「～向って」と訳すことにはさまざまな矛盾が生じてしまう。だが、pour を「～向って」と訳すことによって生じるこの捻じれに気がつくことは難しいかもしれない。なぜなら、主人のディスクールの S_1 と S_2 を、シニフィアンの定義の un signifiant と un autre signifiant に対応させるとき、 $S_1 = \text{un signifiant}$ 、 $S_2 = \text{un autre signifiant}$ としたくなる理由は、pour と→が対応することから pour を「～向って」と訳してしまうことのほかにもあるからである。以下は私自身がした誤解である。

まず、主人のディスクールの S_1 には un があるから、これでこの un をシニフィアンの定義の un signifiant の un に対応させてしまう。もちろん、これは誤解である。ところが、「フロイトの無意識における主体の壊乱と欲求の弁証法」の引用文の①、「 $S(A)$ 、すなわち un signifiant」という記述は、この誤解を正当化してしまう。なぜなら、主人のディスクールの S_1 は $S(A)$ であるから、この文を「 $S(A)$ 、すなわち S_1 」と理解しても、整合性が保たれているように見えるのである。次に、主人のディスクールの S_2 は言語、すなわち $A = \text{Autre}$ であるから、これをと un autre signifiant の autre を対応させてしまう。も

もちろん、この理解もこじつけである。

これらの誤解に従って、主人のディスクールの S_1 と S_2 をシニフィアンの定義の二つのシニフィアンにあてはめるなら、 S_1 représente le sujet pour S_2 . になる。しかし、これでは、引用文の②の文、すなわち「言語 (S_2) は糸巻き (S_1) の代わりに主体を表象する」と整合性が取れない。

そこで、引用文を正しく理解するには、以下の4点に注意しなければならない。(1) ①の un signifiant の un は「～というもの」であり、(2) シニフィアンの定義①' の un signifiant と un autre signifiant の un と autre は、英語の one, the aother に相当する un~, un autre~である。(3) したがって、autre は他者の Autre ではない。(4) また、シニフィアンの定義における主体は、原初の主体 S としての母であるから、シニフィアンの定義の主体を S と考えるのも誤りである。

以上のことから、シニフィアンの定義の pour は「～の代りに」であって、それを「～に向って」と訳すことはできない。同様に、主人のディスクールの矢印の意味も、「～に代って」ということになる。

5. 主体抹消の式と糸巻き遊び

前章で見たように、主人のディスクールがシニフィアンの定義に適うなら、糸巻き遊びは主人のディスクールにも当てはまるはずである。この章では、糸巻き遊びの各段階を式の形で表しながら辿れば、主人のディスクールが出来上がることを確認しよう。そして、→としての pour の意味についても再確認しよう。さらに、それを踏まえて引用文を訳す。なお、その説明のために本章は、これまでの説明を繰り返すが、新たに説明が必要となる場合は適宜それを付け加える。

①去勢以前は、糸巻きは母を表す「記号」であった。しかし、ここに母だけでなく、幼児自身も書き込まれている。

糸巻き

主体(子+母)

その理由は、人間の子が、他の動物と比べて未熟なままで生まれてくることにある。生れたばかりの人間の子は、自由に身体を動かすことができない。そ

のため、個体としては別々でありながら、子は自分自身と母を区別できず、それゆえ「私」という他から区切られた意識もない。子供が糸巻きに託して望むのは、現実の母ではなく、このような融合状態にある母なるものである。

ラカンが、このような原初の母子の状態を「主体」(S, sujet brut、生の主体)としているので、糸巻きがこれを表すことを分数の形で表現すれば上のような式ができる。この分数において、分子が記号、分母は分子が表象するものである。なお、この「主体」は生の主体なので、厳密に言えば母と子を分けることはおかしいが、後にそのように分裂することを示すために、(子+母)のように表記する。

②もちろん、生まれてしまえば、子と母は別の個体である。子が糸巻きに託す、原初にあった母との融合状態(主体=子+母)は、子が未熟なまま生まれてくることから生じた子の思い込みにすぎない。それゆえ、次第に母子の間にある亀裂に子は気付かざるをえない。そこで子は、糸巻き遊びに先立ち、母の視線の先にあるものを母の欲望の対象(「想像的ファルス」とし、それに同一化することで母を引き寄せ、原初の主体の状況に戻ろうとする。

なお、このとき子は、母の欲望の対象として、鏡に映る自らの像に同一化することから、子のこの段階を「鏡像段階」という。そして、子が母の欲望の対象である「想像的ファルス」に同一化し、母と一体になっている状態を、「ファルスを持つ母」という¹⁴。

しかし、子のこの試みは失敗に終わる。まだ言葉を知らない子が母の欲望の対象として同一化するものは「目に見える」ものである。そして、すでに去勢を経て言葉を話す母の欲望は、「目に見えない」もの、すなわち言語でしか捉えられないものとなっている。したがって、子は原理的に母の欲望を満たすことはない。

そこで、子は母との融合が思うようにならないことを紛らわすために、身の回りの小物を母と見なし、それを操つことに喜びを見出す。フロイトの孫の場合、糸巻きを母と見立て、現実には自由にならない母の代わりに、その出現と消失を自由に操つするという遊びを始める。この遊びの中で、記号としての糸巻きが遊びの中で言語(「ダー」と「オー」)に結びつく。

糸巻き→言語(「ダー」と「オー」)

主体

③このとき、糸巻きを放り投げたあとの子の手元の空間が「オー」と結びつく。これにより、それだけで見るなら何も欠けていない空間が、「 」(糸巻きがない)という空間へと変質する。まず、この空間に糸巻きが「目に見えない」ものとして浮かび上がり、次に、その「目に見えない」糸巻きが主体を表象することで、間接的に主体がそこに表象される¹⁵。つまり、言語は、糸巻きが表していた主体を代理表象する。

なお、このとき「オー」は単独で「 」を表すことが出来ないのだから、オー／「 」／主体と考えてはならない。

言語(「ダー」と「オー」)「 」

主体

この空白に「目に見えない」糸巻きが浮かびあがる。

④しかし、言語が作り出した空白に浮かび上がる「目に見えない」糸巻きによって主体が表象されることで、主体(S)の母の部分も、「目に見えない」ものになってしまう。つまり、言語で母を捉えることは、子が自分自身の半身である母を言語に譲り渡し、二度と目で見ることができないものになってしまうことである。そして、子は、「目に見える」世界に取り残されてしまう。

こうして母と子の両者の住む世界が違ってしまったことで、母子の融合状態は不可能になり、母子融合としての主体は分裂し、子は母から切り離される。このことを主体に斜線を引いて表現しよう。

糸巻き→言語(「ダー」と「オー」)

主体

母

主体は／を引かれて「主体」と「母」とに分裂してしまう。もしくは、糸巻きが表していた原初の主体は、言語によって代理表象されるとき、「目に見えない」ものに変質し、子をそこから取りこぼしてしまう。そして、子は母子一体の状態としての「生の主体」から母の部分を失った残りである「主体」になる。こうして、「言語は糸巻きの代わりに主体を表象する」。ただし、このとき、言語によって代理表象される主体とは、「目に見えるもの」から「目に見

えないもの」に変化した「生の主体」、とりわけその母の部分である。

⑤この式の各項に記号を代入すれば、主人のディスクールが得られる。

$$\frac{S_1}{\mathcal{S}} \rightarrow \frac{S_2}{a}$$

糸巻きは子が最初に手にする記号だから「S₁」と記号化される。言語をまとめてひとつのシニフィアンとして記号化したAは、S₁に続くシニフィアンということで「S₂」と記号化される。母子が融合したものとしての主体は、Sと記号化される。これが言語によって表象されるとき、子の部分は抜け落ち、母の部分だけが、「目に見えない」ものになる。これはaと記号化され、「対象a」と呼ばれる。

この結果、母子が渾然一体となったものとしての「生の主体」は二つに分かれる。これがSに引かれた斜線が意味するもので、主体の分裂=去勢を表している。そして、この \mathcal{S} (sujet en tant que barré) は、分裂して母を失った「生の主体」の子の部分を表している。一方、その母は、対象aとして言語によって表象されたことで「目に見えない」ものとなったのだから、 \mathcal{S} としての子と対象aとしての母との直接的な出会いは不可能になる。それを見るには心の目で見るしかない。なお、精神分析が論じる主体とは、この \mathcal{S} で、生の主体(S)から、その核としての対象aを失い、言語の彼方にそれを望むという、「死すべき喋る主体」のことである。したがって、シニフィアンの定義における「主体」は「生の主体」であることに注意しなければならない。

⑥ところで、セミナー11巻でラカンは、以下の図（「主体疎外の定式」）を描いている。この図も、S₁とS₂が結び付いたとき（シニフィアンの連鎖）、S₂は主体の母の部分（下図のX。これは対象aに相当する）を、S₂に代わって表象するようになることで、主体が分裂してしまうことを表していると理解できる。

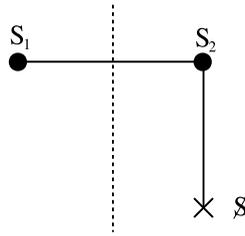


図2 『精神分析の四基本概念』、岩波書店、264頁。

以上のことを踏まえて適宜言葉を補って、引用文を意識する。

$S(A)$ という記号が示すもの——それは何よりもシニフィアンであるもの——が、我々の出発点である①。また、我々のシニフィアンの唯一の定義は、「あるシニフィアンは、もうひとつのシニフィアンの代わりに主体を表象する」である①。したがって、 $S(A)$ 以外のすべてのシニフィアンは、 $S(A)$ の代わりに主体を表象する②。それゆえ、この $S(A)$ がなければ、それ以外のすべてのシニフィアンは何も表さないということになる。というのも、あるシニフィアンがもう一つの最初のシニフィアンに代わる時にだけ、何かが表象されるのだから。

ところでシニフィアンの一揃い、すなわち $S(A)$ 以外のすべてのシニフィアンという集合は、それ自体で完全なものである。したがって $S(A)$ はこの集合には含まれない。つまり $S(A)$ は、この集合を表す円の円周の線でしかありえない。したがって、 $S(A)$ がそれ以外のすべてのシニフィアンによって象徴されるのは、 $S(A)$ がそれ以外のすべてのシニフィアンの集合全体に対する—（そこに欠けているという意味では—1）という $S(A)$ 独自の特徴を持っているからである③。

なお、最後の③の文は、ドーナツを喩えにすれば理解できるように思われる。ドーナツの穴は、実体としてはないが、ドーナツによって作り出される1であり、ドーナツに欠けているという意味で—1である。そして、ドーナツの穴の縁に描いた線を外へとずらしていけば、ドーナツの外周の縁を囲うことが可能である。この意味で、ドーナツの穴は、ドーナツ全体を表すものにもなる。し

たがって、この文③は次のように理解できる。

言語は、それ自体では完全だとしても、そこには、それに含まないもの(1)がある。つまり、言語自体はそれがそこに欠けたものの痕跡(-1)でもある。それゆえ、言語はそこに欠けたもの(1もしくは-1であるもの)を表象・象徴化する。このとき表象・象徴されるものがS(A)である。

6. おわりに——記号の定義について

これまでの考察から本論は、シニフィアンの定義の pour の意味は「～の代わりに」であり、したがってシニフィアンの定義は、「あるシニフィアンはもうひとつのシニフィアンの代わりに主体を表象する」と訳すべきであることを明らかにした。その根拠として、本論は、pour をそのように理解しない場合、糸巻き遊びにおける言語獲得と去勢や、主人のディスクールと矛盾してしまうことを挙げた。

では、記号の定義はどうなるのだろうか。最後に、これまでのシニフィアンの定義の考察を踏まえ、記号の定義を考察し、ここでも pour が「～に代わって」が相応しいことを確認し、シニフィアンの定義の pour に関するこれまでの考察を補強したい。

ラカンが記号を以下のように定義する。

Les signes représentent quelque chose pour quelqu'un.

これも「記号は誰かに向って何かを表わす」と訳されていることが多い。確かに記号は、それを受け取る者に、そこにはない何かを伝える。したがって、この訳は一般的な記号の理解に適っているように思える。

しかし、本論で見たように、pour は「～に代わって」の意味で使われていたのだから、その意味で理解すれば、「記号は誰かの代わりに何かを表現する」になる。もちろん、ラカンが pour を、シニフィアンの定義の場合は「～に代わって」の意味で、そして記号の定義の場合は「～に向かって」の意味でというように、それぞれ別々の意味で用いたという可能性は否定できないが、まずは、同じ意味で使ったと考えるのが自然だと思われる。

また、記号の定義の「誰か、quelqu'un」は、ラカンがそれについて説明す

る個所から、「記号を受け取る者」ではないようである。その個所は、ラカンの、「無意識の位置」(1964)と『精神分析の四基本概念』の一六回目の講義「主体と他者」にある。それらの中でラカンは、シニフィアンの定義に加え、以下のように記号の定義についても述べ、そのどちらでも、「quoi 誰か」を「さまざまなもの」、「世界」、「宇宙」としている。

このだれかは、極限的には、よく言われるように、それが情報によって循環しているかぎりでの世界でありうる。情報が総計されるいかなる中心も、それは誰かと見なされることはできるけれども、主体と見なされることはできない¹⁶。

「無意識の位置」『エクリ』

今、誰かある人と申しましたが、これはさまざまなものごと (beaucoup de choses) であってかまいません。たとえばそれは、しばらく前から人々がしばしば口にしてるように、エントロピーに逆らって情報が宇宙を駆け巡っている、という意味での全宇宙で当ても良いわけです¹⁷。

「主体と他者」『精神分析の四基本概念』

したがって、記号の定義を「記号は誰かに向って何かを表わす」と訳す可能性が無くなったわけではないが、その可能性は低いように思われる。では、「記号は誰かの代わりに何かを表現する」と訳すなら、記号の定義は、どのように理解すべきだろうか。

そこで、記号の定義における *quelque chose* と *quelqu'un* の違いを考えるために、*quelqu'un* が答えとなる問いの「誰か *qui*」という疑問詞と、*quelque chose* が答えとなる問いの「何か *quoi*」という疑問詞との違いについて考えてみよう。

—Qui est ce ?

—C'est quelqu'un. (quelqu'un には固有名が入る。)

—Qu'est ce que c'est ?

—C'est quelque chose. (quelque chose には普通名詞が入る。)

例えば、ある動物を見て「それは何 (que) ですか?」と問う場合と、「それは誰 (qui) ですか」と問う場合とを比べてみよう。最初の問いの答えは、種を尋ねる問と理解される。だから、その答えは、「それは犬です」、「それは猿です」のような答えが返ってくる。一方、同じ動物に「それは誰ですか」と尋ねたとしよう。すると、それはその動物の個体の名前を尋ねる問いとして理解されるだろう。この場合、「ポチです」、「マックスです」という答えが返ってくるだろう。

「何か」という疑問詞は、それが属すカテゴリーを尋ねる問いである。一方、「誰か」という疑問詞は個体一つ一つが問題になる問いである。だから、「記号が、quelqu'un の代わりに quelque chose」を表すというのは、記号が、「物理的には同じものなど、何一つ無いこの世界、宇宙、さまざまなものを分節して均質化するものである」と言っていると考えられる。つまり、quelqu'un とは言語によって分節される前の状態であり、quelque chose とはそのような世界が語で分節されることで語に生じた意味と考えられる。

もし、この理解が正しいなら、上の引用でラカンが「誰か」を「さまざまなものごと」、「世界」、「宇宙」と言い換えているのは、記号によって、個体の集合が種としてカテゴライズされる以前の状態を説明するためだと思われる。

次に、もし、このような記号の定義の理解が正しいなら、記号の定義の「誰か」を「主体」と読み違えてはならないとラカンが注意することは、何を意味するのかについて考えてみよう。本論で、シニフィアンを使う個体が主体であるのに対し、記号を使う個体は種の一部にすぎず、緩やかに繋がっていることを指摘した。「誰か」が去勢を経た「話す主体」でないのなら、「誰か」とは、動物のように個体としては別々のものではあるが、未だ主体ではない生き物、つまり、記号を用いるとしても、シニフィアンを用いていない生き物ということになる。サルを例にすれば、以下のような表にできるだろう。

表 5 quelqu'un と quelque chose の違い

quelqu'un 誰か	一匹のサル。ただし、主体ではない
quelque chose 何か	サルという種。

記号によってカテゴライズされる前の「誰か」としての様々なものは、確かにそれぞれ一個の個体である。しかし、この「誰か」は、去勢を経たことで個体に生じた「死ぬべき語る主体」ではなく、種としてカテゴリー化されるしか

ないものである。

本章では、本論の考察でニファインの定義の pour を「～に代わって」と理解したことを踏まえ、記号の定義においても pour を同様に理解することを試みた。そして、この解釈に基づき、ラカンが、記号の定義の「誰か」を「さまざまなものごと」、「世界」、「宇宙」としたことと、記号の定義において「誰かは主体ではない」と繰り返すことについて以上のように考察した。このように記号の定義理解することは、本論で見た、シニフィアンと記号の違いとも整合性があることから、pour は「～の代わりに」と訳すことが相応しいと言えるのではないだろうか。

註

1 ラカンが用いるシニフィアンとは、もちろん、ソシュール(Ferdinand de Saussure, 1857-1913)由来のものである。しかし、ラカンがこの語を用いる方法は彼独特のもので、ソシュールがこの語を用いる方法とはずいぶん異なっている。

2 Translated by Bruce Fink, in collaboration with Héloïse Fink and Russell Grigg, Jacques Lacan, *Écrit : the first complete edition in english*, Norton, New York, 2006.

3 もちろん、ラカンがシニフィアンの定義を応用して二つのシニフィアンについて説明している箇所はいくつもある。しかし、ラカンがシニフィアンの定義を応用するどの箇所でも、シニフィアンの定義の二つのシニフィアンとその応用における二つのシニフィアンの関係が、不明瞭なのである。

4 Jacques Lacan, “Subversion du Sujet et Dialectique du Désir dans l’Inconscient Freudien”, 1960, *Écrit*, Édition du Seuil, Paris 1966, p.819. ジャック・ラカン「フロイトの無意識における主体の壊乱と欲求の弁証法」『エクリⅢ』佐々木孝次、海老原英彦、芦原脊訳、弘文堂、331頁。

5 Cf. *Le Séminaire de Jacques Lacan Livre XI, Le Quatre Concepts Fondamentaux de la Psychanalyse*, texte établi par Jacques-Alain Miller, Seuil, 1973, p.180. p.188. 『精神分析の四基本概念』小出浩之、新宮一成、鈴木國文、小川豊昭訳、岩波書店、2000年、264頁、267頁。

Lacan, “Position de l’Inconscient”, *Écrit*, p 840. ジャック・ラカン「無意識の位置」『エクリⅢ』、364頁。この箇所のシニフィアンの定義は、ここで得た単純化した文と同じ表現である。

6 『エクリⅢ』邦訳 330頁。

7 『エクリⅢ』邦訳 314頁。

8 フロイト『著作集 6』井村恒郎、小此木啓吾訳、人文書院、1970年、155-158頁。

9 本論での糸巻き遊びにおける「ない」の成立の説明は、石田浩之『負のラカン』誠信書房、1992年の糸巻き遊びの分析を参考にしている。

10 ソシュールの理論に従えば、これはシニフィアンと言うべきである。ソシュールにとっての「記号」とは、「シニフィアン」と「シニフィエ」をまとめた概念であり、分母にシニフィアン、分子にシニフィエを置いた式が楕円の中に取っている(Ferdinand Saussure, *Cours de Linguistique générale*, Payot et Rivages, 1995, p. 158.の図を参照せよ)。ソシュールが、シニフィアンとシニフィエをまとめて記号としたのに対し、ラカンは、記号とシニフィアンの語を性格の異なる二つの記号を区別するために用いていることに注意したい。

11 石田浩之『負のラカン』、79-103頁、参照。

12 ラカンの友人のパタイユは、『宗教の理論』で、「内在性」という言葉で動物を連続するものとし、禁止によって個体となった人間と区別している。これはラカンの去勢の考えと一致し

ている。ジョルジュ・バタイユ『宗教の理論』湯浅博雄訳、人文書院、1985年、を参照。

¹³ ネアンデルタール人は、我々の直接的な先祖ではないが、埋葬を行ったことが知られ、骨格的に言語を喋っていたと考えられている。なお、ラカンの友人のバタイユは『ラスコーの壁画』でネアンデルタール人と死や埋葬について考察している。ジョルジュ・バタイユ『ラスコーの壁画』出口裕弘訳、二見書房、1975年。

¹⁴ このカップリングを切りはなすのが去勢であることから、ラカンの場合、去勢は子に対してではなく母に対して行われる。

¹⁵ この、現前と消失を繰り返し、言語導入の役割を果たした糸巻きを、ラカンは「象徴的フェルス」とした。

¹⁶ ジャック・ラカン「無意識の位置」『エクリ III』364頁。

¹⁷ ジャック・ラカン「主体と他者」『精神分析の四基本概念』、277頁。

本論は、平成21年度（2009年）科学研究費補助金（課題番号21520142）による研究成果の一部である。